

桜蔭俳話会 九月句会(第二九八回) 於桜蔭会館平成二十三年九月二十五日

生きてゐるものに影ある良夜かな 守

【自句自解】

生きてゐるものに影があるのは当たり前である。しかしながら、生きていないものであっても、この世に存在し、何らかの光源に曝されているものであれば、必ず影を伴う。掲句の「生きてゐるもの」は、生物と非生物の別を言うのではなく、「生き残りしもの」のことである。東北大震災などを考えると、自分が良夜のこのときに生きてゐることは全くの偶然であり、これに思い至れば、今在ることに感謝して日々を送らなければと思う。

帰燕かな航跡といふ海の傷

貞勝

【秀句鑑賞】

航跡を「海の傷」とした把握は卓抜である。海は全ての命の源泉であり、人間はその恩恵のもとに生きてゐる。しかるに、人間は便宜のために船を造り出し、常態としては平らかである海面をスクリーンで切り、掻き乱している。作者は、船の航行によって海が傷を受けているものとの観点からこれを詩的に捉えたのである。この傷は、時間が経てばやがて消え、海面は平らかに回復するものがある。

少年の恋の行方や鳳仙花

守

【自句自解】

人は年代を問わず、何かに恋をして生きてゐるのではないか。恋の対象は、大方は異性かも知れないが、人によって仕事や学問、芸術あるいは宗教上のミッションかも知れない。掲句は「少年の恋」である。恋は純粹なものであればある程破れたときのダメージは大きい。挑戦なくしては何もかち得ない。下五の「鳳仙花」は少しばかり暗示的ではあるが。

赤蜻蛉左廻りを好みけり

秀一

「秀句鑑賞」

赤蜻蛉の旋回の習性が左回りだという定説は知らない。むしろそれが定説であるならば、共通知識をただ一句に盛り込んだに過ぎないから、俳句としての価値は余りない。そのような定説がないからこそ、俳句が成立するのである。作者の眼前の赤蜻蛉は飽きることなく左旋回を繰り返している。そこで嘘いっわ

りないものとして、掲句が得られたのであろう。このように確信的に詠まれることによつて、読者は実際にそうなのであろうと思わせられる。俳味のある句である。

鶏頭や酸素マスクの中の声

友子

【秀句鑑賞】

酸素マスク装着後の病者の声は音量と明瞭度が低下し、看護する家族の者にとつて一段と聞き取り難いものとなっている。それでも酸素マスクを外すことは主治医に止められている。容態の悪化を目の前にしても如何ともし難い家族の目は、じつと患者の顔とそれを覆っている酸素マスクに注がれている。作者の目には、酸素マスクのホースがあたかも鶏の鶏冠のように見えたのであろう。掲句は看取られた後の作句であろうが、作者の観察と季語の据え方は鋭い。

文責 副代表 増田 守